

【2026 ワールドチャレンジカップ・クルジュナポカ大会】

開催日：2026 年 6 月 26 日～28 日

開催地：ルーマニア・クルジュナポカ

ワールドチャレンジカップ・クルジュナポカ大会が開催された。

本大会には 31 か国から個人 53 名、団体 15 チームが出場し、個人には世界のトップ選手をはじめ、今後の国際舞台での活躍が期待される若手選手も多数出場した。

日本からは、ナショナル個人強化選手の松坂玲奈選手、岡田華英選手が出場した。

松坂選手は 4 月のワールドカップ・タシケント大会以来、岡田選手はワールドカップ・バクー大会以来となる、今シーズン 2 戦目の国際大会となった。

国際大会への出場機会が限られる中、練習で積み重ねてきた内容を試合で発揮するとともに、世界のトップ選手との差を確認し、今後の強化につながる課題を明確にすることを目的として本大会に臨んだ。

【松坂玲奈】 個人総合 23 位：99.650

<リボン>

得点：24.800（DB6.8／DA3.2／A7.45／E7.35）

長期にわたる体調不良の影響により十分な練習時間を確保できないまま大会を迎えたが、現在のコンディションでどこまで演技をまとめられるかを確認する大会となった。

演技冒頭のブーメランで落下があったほか、バックルジャンプターンでは形が不明確となり減点、4 つ目のリスクでは回転不足により予定していた難度として認定されなかった。一方で、演技全体には松坂選手らしいスピード感とダイナミックさがあり、存在感のある演技を見せた。

一つひとつの難度の精度は十分とは言えなかったものの、持ち前の表現力や演技の勢いは国際舞台でも十分に通用することを確認できた。

<クラブ>

得点：24.550（DB6.3／DA3.6／A7.5／E7.2／P0.05）

1 種目目の反省を踏まえ臨んだクラブでは、生き生きとした表現や音楽との一体感が感じられる演技を披露した。

しかし、パンシェターンの軸の乱れやリスクでの落下、2 本のクラブを用いた DA で乱れが生じ、複数の難度を得点へ結び付けることができなかった。演技全体の印象は良かっただけに、技術的な精度不足が大きく得点へ影響した内容となった。

世界で戦うためには、演技の勢いだけでなく、どんな状況下においても難度一つひとつを確実に実施する安定性が求められる。

<ボール>

得点：24.350 (DB6.0／DA3.8／A7.35／E7.2)

2日目最初の種目となったボールでは、大きく演技を崩すことなく最後までまとめることができた。

一方で、リスクでの回転不足やフェットピボットの乱れなどが見られ、予定していた難度を十分に得点へ結び付けることはできなかった。演技全体を通して落ち着いた実施は見られたものの、世界基準では身体難度やリスクの精度が得点へ直結することを改めて確認する内容となった。

<フープ>

得点：25.950 (DB7.5／DA3.5／A7.85／E7.1)

最終種目では4種目の中で最も松坂選手らしい勢いのある演技を見せた。

しかし、2つ目のリスクでは投げが大きくなり、予定していた身体操作を実施することができずキャッチ姿勢も乱れた。続く3つ目のリスクでも投げと身体操作のタイミングが合わず、本来獲得できる得点を逃す結果となった。

4種目を通して、十分な準備期間を確保できない中でも現時点で発揮できる力を最後まで出し切ることができた。今後はコンディションを回復させるとともに、身体難度やリスクの精度を高め、本来持つ競技力を安定して発揮できる状態へつなげていきたい。

【岡田華英】 個人総合 40 位：88.400

<クラブ>

得点：23.350 点 (DB6.0／DA3.3／A7.0／E7.05)

前日のボディウム練習では細かなミスも見られたものの、演技全体を通して強いエネルギーを出しながら試合へ向けた調整を進めることができた。

演技序盤は力強さと伸びやかさを見せ、良い流れで演技を進めていたが、2本投げのDAでキャッチのタイミングが合わず落下。その後、4つ目のリスクではシリーズが抜け、予定していた難度を得点へ結び付けることができなかった。

ミスが出た後も最後までエネルギーを落とすことなく演技を継続できた点には成長が見られたが、試合直前から生じたタイミングのズレを修正し切れなかったことが演技全体の完成度に影響した。

<リボン>

得点：22.200 (DB5.9／DA2.8／A6.9／E6.6)

クラブ終了から約 30 分という短時間での演技となったが、身体の動きや手具操作には前種目よりもエネルギーが感じられた。

スタートのリスクは予定どおり実施できたものの、2 つ目のリスクでは投げの高さと距離に対して身体の動きが追いつかず体勢を崩しながらのキャッチとなった。さらにブーメランでの落下や 4 つ目のリスクでシリーズが抜けるなど、本来積み重ねてきた内容を十分に発揮することができなかった。

積極的に演技を見せようとする意識は感じられた一方で、その意識が技術の正確性や集中力とのバランスを崩す要因となった。

<フープ>

得点：21.000 (DB5.8/DA3.1/A6.2/E6.2 Pen0.3)

2 日目は、意識するポイントを整理し、緊張の中でも伸びやかに演技することを目標として試合に臨んだ。

序盤は一つひとつの技を丁寧に実施することができていたが、「ミスをしたくない」という意識が強くなり、ドゥバンフェッテで手具が場外となった。予備手具を使用して演技を継続したものの、ミスの後に冷静さを取り戻すことができず、最後のリスクも予定どおり実施することができなかった。

ミスが出るまでは予定していた内容を着実に実施できていただけに、一つのミスが演技全体へ影響してしまう精神面での課題が明確となった。

<ボール>

得点：21.850 (DB4.9/DA3.2/A6.95/E6.8)

最終種目では、限られた時間の中で修正点を整理し試合へ臨んだ。

最後まで強いエネルギーを出そうとする姿勢は見られたものの、投げ受けへの不安からリスクに対する身体操作が小さくなり、複数のリスクで空中下の回転不足が見られた。また、演技中盤以降は身体が先行する場面が増え、支持ありのエカルテローテーションの乱れや最後の足蹴りリスクで走ってキャッチする場面が見られた。

前回のワールドカップでは過度な緊張により本来の演技を発揮することができなかったが、今大会では最後まで演技をやり切ろうとする姿勢には改善が見られた。一方で、「良い演技をしたい」という気持ちと冷静な判断を両立させることが課題となり、世界で戦うためには技術だけでなく、90 秒間を自分の演技として表現し切る力をさらに高める必要がある。今大会で得た経験と課題を国内大会へつなげ、技術・表現・精神面のすべてにおいて更なるレベルアップを図っていきたい。